

二〇二五年度

帰国生入試 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから一八ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「わたし」は夫との離婚を機に実家へと戻り、自分の両親、息子の翔とともに暮らしている。

翔が布団を敷いて眠っている寝室の襖をそと開け、寝顔を確認する。布団に、左から、イーブイ、ミュウツー、翔と収まっていて、翔の顎の下から顔を出しているのは今年に入ってから手に入れた新入りの、騎士竜戦隊リュウソウジャーのリュウソウブルーだ。リュウソウジャーは変身が可能で、現在は変身用ボタンを押したのだから、「ナイトモード」に形を変えている。普段はソウルモードでパワーをチャージし、ナイトモードとして開放することで真価を発揮する——というのが公式ページの情報だった。決め台詞は、「叡智の騎士！ リュウソウブルー！」。叡智には知恵や知性という意味があることから、リュウソウブルーにあこがれる翔の理想とする「かっこいい」男性像はいつからか「かっこいい」男となった。

「おれってかっこいいんだよ！」

顔見知りにあうたび、わたしの背後に隠れて様子を窺いながら、かっこいいの要領でかっこいいを多用する息子にわたしはたびたび赤面した。

「かっこいいかっこいい。もう恥ずかしいからやめて」

動揺し、翔の頭を小突くわたしの横で、行きつけの八百屋のおじさんが苦笑しながら「『能ある鷹は爪を隠す』だよ」と諭す。新しい言葉は、息子の知的興味に拍車をかける。

「それってどういう意味？」

翔の背の高さに合わせて腰を屈めながら優しく解説を施す八百屋のおじさんのような寛容さを、わたしは持ち合わせていない。臆することなく説明できるほどの自信も、それを裏付ける知識もない。言葉の用法がただしいのか、確信もてない。あるいはまた、使い慣れた、日常的に使う言葉ですら、改めて意味を問われると煩わしく感じてしまう。いいから早くご飯食べなさい。いいから早く片付けなさい。そんなことよりママに言うことあるでしょう。わたしはいつも息子の発言をないがしろにする。投げやりにし、後回しにする。単純に億劫な場合もあるし、何より、自分の言葉に自信が持てない、

不確実なことはできるだけ言いたくない、よってわたしは回答に逃げ腰になる。

「わからない言葉が出てきたら、これで引くんだよ」

わたしは実家の自室にあった学生時代に使っていた分厚い辞書を、丁寧に埃をはらってから彼に手渡す。

「これ、ママがつかってたやつ？」

「ママのだけど、ママはほとんど使ってない。だから綺麗でしょ？」

「なんで使わなかったの？」

「ママ、辞書なんか引かないもん。勉強嫌いだったから。でもお母さん……ばあばがね、買ってくれたから」

「X じゃん」

「生意気言うならあげないから」

子供の集中力など信用ならない。膝の上に辞書をのせ、最初は興味本位で細かい文字の羅列を眺めていた翔は、やがて手元のリュウソウブルーをいじりはじめ、好きなアニメの放送時間になるとテレビの前に鎮座した。辞書は最後に開いたページのまま、めくられることなくフロアリングの上に置き去りにされている。

翔は辞書をほとんど開かなくなっただけでも、持ち歩くことをやめなかった。自分の一部みたいに肌身離さず、近所の公園に遊びに行くときやスーパーに買い物に出かけるだけでも持っていきたいと駄々をこねる。

「持って行きたくても入らないでしょ？」

翔が愛用しているクマのぬいぐるみ型のボディバッグは、ほとんどのものが入らない。背中のチャックを開くと白い布地の間に水筒がひとつ、あるいはお気に入りのぬいぐるみが一体、最近ではリュウソウブルーが入ればそれだけでいっぱいになってしまうほどの容量だ。

「荷物になっちゃうよ？ 重たいよ？ 疲れるよ？」

翔はそれでも持つて行くと言ってきかない。鞆に入らないのなら手で持つていくと頑なに離さなかった。ここまでするもはや意固地だ。呆れて、勝手にしなさいと怒鳴る。翔は本当に辞書を抱えて家を出る。小さな身体で大きな辞書を抱えた子供が歩いていれば人目につく。「すごいねえ難しそうな本読んで」「何読んでるの？ おばちゃんに見せて」何かのタイ

ミングでそんな風に話しかけられるたび、翔は照れくさそうに身をよじりながらもどこか得意げに辞書を開き、自分の知っている言葉の解説をはじめめる。褒められるとすぐに調子に乗り、翔にとって「かっこいい」と同義語である「かしい」が頻発されると、ひとりで悦に入った。しかし周囲に人がいない時に辞書を開くことはなく、翔にとってそれはもはやただのお飾りに過ぎない。「かしい」と威張れるアイテム。読みもしない辞書を抱え、やがて疲れると「もう持てない」とぼやき、わたしに押し付けてくる。

「だから言ったでしょう荷物になるって。ママあれほど翔に言ったよね。重いよって。疲れるよって」

案の定の結果に呆れつつ、まだ物事の道理もわからない子供の小さな失敗を咎めるのも大人げないと思いなおし、容量の大きいマザーズバッグの持ち手を片方、肩から外した。

「ほらっ」

分厚い辞書で膨れたバッグを右肩にかけ、左手で翔と手をつなぐ。

頑固なところは誰に似たのだろう。数日前、夕食のときに、母親に愚痴のつもりで首を傾げながらそうこぼすと、彼女はそれを嫌味だと解釈したらしく、「あんたに言われたくない」と急に攻撃的な口調でとげとげしく牙をむいた。

「え、なに？ 何なの？ 何で喧嘩腰なわけ？」

「あんたから振ってきたんでしようが」

「はあ？ 勘違いにもほどがあるわ。誰がお母さんが頑固って言った？」

「いまのはそうとれるでしょう」

「とれないよ。どう解釈したってとれないわ。被害妄想が過ぎるんだけど」

「もういいわ。あんたとなんか話したくない」

⁶ 母親は食べ終えた食器を乱暴に重ね、席から立ちあがる。

「なんなのよ……。ほんと感じわるい」

配達から帰宅した父親が、リビングに漂う険悪な空気を察し、そそくさと翔のもとにいつて耳元で話しかける。翔はテレビの前で画面を見ながらゲームに夢中だ。帰宅してから、また思いつきでめくったかと思えばすぐに飽きた辞書は、開い

たままフロリングの上に置き去りにされている。

「ママたち、またなんかあったの？」

父親は昔から内緒話ができない。自分ではできているつもりでも、声のトーンは下がっていないので筒抜けだ。

「……いつものやつ。さわらぬ神にたたりなし、だよ。じいじ」

コントローラーから手を離さずに翔は告げる。わたしは怒りを表明するためにわざと大きな音を立てて茶碗の上に箸を置く。

「翔！ 今日のゲーム時間、とっくにオーバーしてるよ！」

「あとちょっと……」

翔のそばまで勢いよく飛んで行って、コンセントから電源を引っこ抜いた。機関銃のような泣き声リビングに響きわたる。

「約束でしょ。約束守れないなら電源抜くってママ言ったよね」

床の上で身体をねじらせ、泣きわめく息子に理路整然と諭す。

「そんなに頭ごなしに怒らなくなったっていいじゃない。叱るんじゃないって説明すればわかるんだから翔だって」

「お母さんは黙ってて！ わたしの教育に口出ししないで」

「ああそう、そうですか。わかりました。だったら私の目の届かないところでやんなさいよ。目の前にいたら口出しもしたくなるでしょうが」

泣き続ける翔を放置して席に戻る。冷蔵庫の前で手にした缶ビールのプルタブを開けることもできずに立ち尽くしていた父親がわたしと入れ替わるように翔の元へ行きなだめはじめた。

（山下紘加「可及的に、すみやかに」）

問一 ― 線部 1 「おれってかしこいんだよ！」とあるが、翔がこうに言うのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 翔は「叡智の騎士」を名乗るリュウソウブルーにაცოგაれており、自分も知恵や知性を備えた人物になりたいと思っているから。

イ 知性豊かな人物を目指している翔にとっては、「叡智の騎士」であるリュウソウブルーよりもかしこくなることが理想だから。

ウ ほかの子供より多くの知恵を身につけてきた翔にとって、人と比べてかしこいことは、かっこいいことより価値の高いことだから。

エ 翔は知識の豊富さを大人に褒められることに喜びを感じており、大人に認められることこそがかっこいいことだと考えているから。

問二 ― 線部 2 「もう恥ずかしいからやめて」とあるが、どのような点が「恥ずかしい」のか。次の中から最も適当なものをを選び、記号で答えなさい。

ア かしこいことだけが、かっこいいということなのだと思います点。

イ 自分がかっこいいことに自信が持てず、母親の背後に隠れてばかりいる点。

ウ 自分のことをかっこいいとは言えず、かしこいと言ってごまかしている点。

エ むやみやたらに、自分で自分のことをかしこいと言ってはばからない点。

問三 ― 線部 3 「能ある鷹は爪を隠す」だよ」とあるが、八百屋のおじさんがこのように言うのはどういう気持ちからか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分は「かしこい」と強調してくる翔に、普段は自分の能力を隠しておいて周囲を油断させ、必要な時にそれを使うことでうまくいくのだと教えたい気持ち。

イ 自分のことを「かしこい」と言う翔に、かしこさとは人にひけらかすのではなく、いざという時にそれを十分に用いることが大事なのだと知らせたい気持ち。

ウ 翔は自分のことを「かしこい」と言っているが、自分のことを知り、自分の至らなさにも気づくような謙虚さをもつことこそが真の知恵なのだと伝えたい気持ち。

エ 翔は自分が「かしこい」と褒められたがっているが、本当のかしこさとは、自分のためではなく人のためにひそかに何かをすることなのだと気づかせたい気持ち。

問四 ― 線部 4 「わからない言葉が出てきたら、これで引くんだよ」とあるが、「わたし」がこうに言うのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 翔が知らない言葉に触れるたびに、その意味を聞いてきて家事の邪魔をしてくるので、かしこくなりたいと言いつた翔のひまつぶしをしてくれる辞書を渡して時間をかせこうと思ったから。

イ 勉強が嫌いな自分にはできなかったが、かつて母親が自分に期待していたように、翔にはわからない言葉を調べて、理解できる言葉を自力で増やせるようなかしこい子になってほしいと思ったから。

ウ 翔に言葉の意味を問われることを面倒だと思ふ気持ちや、言葉の知識に自信がなく不確かなことを言いたくない気持ちがあり、自分が答える代わりに翔自身に辞書で調べてもらおうと思ったから。

エ 言葉の意味を聞かれるたびに、親として適切に対応できるかを翔に試されていると感じ、回答を避けてしまう自分に嫌気がさしたので、辞書を渡すことでその重圧から解放されたいと思ったから。

問五 X に入ることわざとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ネコにかつお節^ぶ

イ プタに真珠^{しんじゅ}

ウ イヌも歩けば棒^{ぼう}に当たる

エ サルも木から落ちる

問六 —— 線部 5 「翔は辞書をほとんど開かなくなってからも、持ち歩くことをやめなかった」とあるが、それはなぜだと考えられるか。六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

問七 —— 線部 6 「母親は食べ終えた食器を乱暴に重ね、席から立ちあがる」とあるが、「母親」がこのような行動をとったのはなぜか。その理由として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 翔の頑固な性格は翔の祖母である自分に似たものだと、「わたし」から責められているように感じ、さらにその受け取り方が極端な思い込みだとまで言われたことが腹立たしかったから。

イ 翔の性格を頑固だという「わたし」の発言に納得^{なつとく}がいかないだけでなく、それを指摘^{してき}しても勘違いだと言って取り合わない「わたし」の態度があまりにも大人げなく気に入らなかったから。

ウ 誰よりも頑固な「わたし」が、それを棚^{たな}に上げて自分のことを厳しく責め立てていると思い、さんざん「わたし」の頑固さに悩^{なや}まされてきた身として我慢^{がまん}ならないほど悔^{くや}しかったから。

エ 翔の頑固な性格の原因は翔の祖母である自分にあると「わたし」が決めつけているのに加えて、とげとげしい口調で自分を責め立てるような口ぶりがどうしても許^{ゆる}しがたいと思ったから。

問八 —— 線部 7 「怒りを表明するためにわざと大きな音を立てて茶碗の上に箸を置く」とあるが、「わたし」が怒りを覚えたのはなぜか。その理由として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」の言うことを聞かずにゲームをやり続けている翔が、意味もわかっていないことわざを当てつけがましく言ってみせたことが腹立たしかったから。

イ ゲームを終える時間を守っていない翔が、「わたし」と母の争いは相手にする必要がないと、わざわざことわざを用いて軽くあしらったことが気にさわったから。

ウ ゲームに夢中で「わたし」の言うことを聞こうとしない翔が、「わたし」よりも母に味方するような態度を見せてきたことに許^{ゆる}しがたいものを感じたから。

エ 約束の時間を過ぎてもゲームをやめようとしないう翔が、「わたし」をわざと怒らせるような言い方で母とのいさかいを評して、挑^{ちようはつ}発^{はつ}してきたと思ったから。

問九 —— 線部 8 「缶ビールのプルタブを開けることもできずに立ち尽くしていた父親」とあるが、この時の父親の様子についての説明として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族の感情的な対立が激しくなっていく様子を見て、缶ビールを開けるタイミングを失ったまま、あつけにとられている。

イ 頭に血が上った「わたし」と「母親」の口論の激しさにおびえて、缶ビールを開けるのも忘れて、ただただ固まっている。

ウ いま缶ビールを飲もうとすると自分も怒られかねない状況なので、翔には申し訳ないが、静観するしかないと思っている。

エ 缶ビールを飲むのをやめて翔のために二人を仲直りさせようと思ったが、その上手なやり方が思い浮か^うばずに困っている。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日常は哲学的な瞬間に満ちている。よくよく考えるとそれって何なんだと思えるような瞬間、^①条理が異化されてしまうような瞬間、それをわたしは「哲学モメント」と名付けて収集してきた。

(中略)

天気予報もまた、哲学モメントを感じさせる。「天気」という、人間が左右することのできない事象を「予報」するとは、まるで預言者ではないか。もし古代の人間がタイムスリップしてしまった場合、もっとも驚くのは、便利な板のように見えるスマホや、びゅんびゅん飛ばす鉄の塊である新幹線などではなく、天気が「予知」され、それを当たり前のようにわたしたちが享受しているという事態なのではないだろうか。

それに、気象予報士は、しばしば奇妙な言葉遣いをする。^②

「変わりやすい空」

「夜のはじめごろ」

「荒れた天気」

「天気が下り坂」

まるで詩のようだ。天気予報では、明確さや平易さを重んじるとはいえ、そのおかげか、かえって日常から離れた独特の言い回しがある。

こうした詩のような言葉で、気象予報士はわたしたちに「予言」をする。それをほとんどの場合、わたしたちは疑わない。映画やドラマで、突然大雨が降ったりして「天気予報、外れちゃったね」などという台詞を役者に言わせることはあっても、それによって天気予報という営みそれ自体に対して不信感を募らせることはない。怒り出すひともいない。それよりもむしろ、予報が外れることはロマンチックな何かが開始される合図であり、登場人物も、観客も、気象予報士が何を言っていた

のかは、もはやどうでもいいのだ。

わたしたちは天気予報という存在を、全く疑っていない。天気予報が必要がないとか、意味がないとか言っているのではない。わたしたちはあまりに当然だと思っている。^③そのふしぎさを味わいたい。

人間の叡智を駆使し、科学はすすくと育った。かつては神の御業とされていたものが、いまや人間の手によって可能となった。神がかりだったものが、当たり前になった。そこにはもう、超越的な何かの手触りなんて、失われたかのように思える。テクノロジーは発展し、あらゆることが検索可能で、^aシンコウ知能による未来予示だつてある程度できるのだろう。しかしどこか「天気予報」という言葉には、預言的なものを感じる。なぜだろう。科学というよりは、^④お告げのように体感される。神に少しだけ触れることができるような、そんなヨチが残っているような気がする。^b

それはもしかすると「未来」という、まだ存在しない時間軸を、一瞬でも生きることができからなのではないか。朝、ニュースの終わりに、落ち着いた声で今日の「予言」をする気象予報士は、わたしたちの時間感覚を揺さぶってしまう。週間予報なんて特にそうだ。一週間後の自分がどうなっているか、想像すらできないのに、わたしたちの把握をはるか超える自然がどのような動きをするのかを、淡々と述べてくれる。

今日から四日後は、このまちは曇りである。だが次の日は、晴れになるらしい。それを聞いて、わたしたちは一瞬その時間に吹き飛ばされる。想像もつかない四日後の、曇り空が広がるまちを、そのときだけ生きる。

あらゆる科学が発展した現代でも、なお人間が直接触れることのできない領域が「時間」なのだろう。だからこそ、時間に少しでも触れることができる営みは、どこか神めいている。

そのせいか冷蔵庫も、ほんの少しだけ神秘的なものの感触がある。^⑤冷蔵庫が興味深いのは、電気力で食べ物や冷やすことができるからではない。時間をいじることができるからだ。

わたしはなかなか、冷蔵庫の中身を意識しながら生きることができない。アイスコーヒーでも飲もうかと扉を開けた瞬間に、二日前に購入した鶏肉が目に入り慌てふためく。スーパーから帰ってきたらすぐに下シヨリをすればいいのに、それを怠るのだ。考えるよりも先に手が動き、鶏肉を今度は下段の冷凍庫に突っ込む。これであと何日かは大丈夫だ。鶏肉は腐らない。扉を閉め、アイスコーヒーを飲む。

しばらくして、アイスコーヒーのおかわりをしようと立ち上がり、冷蔵庫に向かう。水をグラスにいれるために冷凍庫を開けると、数時間前に詰め込んだ鶏肉が、うすいピンク色のまま、ひそやかに凍^{こお}っている。

本来であれば腐^くってしまう肉が、静止した時間の中で沈黙^{ちんもく}している。ひどく静かで、清潔で、不自然な鶏肉が、ただ目の前にある。

これはまるで、時間を止める神の御業ではないか。

神は時間を止めるだけではない。ものすごいスピードで進めてしまうこともある。

カレンダーめくり忘れていた僕^{ぼく}が二秒で終わらせる五・六月

(木下龍也)

日常的なふるまいである。そして、ユーモラスで、だがどこか傲慢^{ごうまん}な行^{こう}為である。歌人の穂村弘と東直子もまた、この短歌に神の姿を見ている。

穂村 神のごとき振る舞^まいです。時間というものは、本当は神の領域のもの。時間だけは人間がどうやっても触れられない摂理^{せつり}の中の最大のもののひとつでしょう。なのに、「僕」は、二秒で五・六月を終わらせた。神だな、みたいな(笑)。東 カレンダーをめくるという行^{こう}為そのものは、なんでもない行^{こう}為なんですけどね。日常のなんでもない行^{こう}為の中に、時間が見えることがあるってことですね。それを見つけたすだけで、一首が成立する言葉が見つかりそうですね。

(東直子・穂村弘『しびれる短歌』ちくまプリマー新書、二〇一九年、一一五ページ)

もう誰も来なくなった祖父の家などに入り、時間の止まってしまったカレンダーを見つけることがある。ひっそりと冷えた剥製^{はくせい}のようだ。人間がいないと、時間は進むことすらできない。冷凍庫に時計を入れてしまった感触。常温^{もど}に戻すことはもうできない。

しかしその時間をふいに進めなくなったとき、わたしたちは突然、高慢^{こうまん}になる。びりっ、びりっ、びりっ、と勢いよく紙をヤブ^{やぶ}り、時間を無理に進ませる。足元にはばりばりの裂^きけ目をした紙が折り重なっていく。進むことを強^しいられた時間は、おとなしく従っている。

あるいはこの短歌のように、部屋の中にある忘れられたカレンダーを見つけたとき。すでに七月に入っているのに、カレンダーは五月のままだ。ほとんど思考を動かさずに、一瞬のうちに五月を引き剥^はがす。そのまま流れるように六月のカレンダーも千切り終える。わずか二秒だ。この二カ月には、出会いも別れもあった。さまざまな味をしたものたちが、わたしの喉^{のど}を通^とっていった。いろいろな考えが頭をよぎり、また消えていった。

だが、何事もなかったかのように、そんなこと取るに足らないことのように、「僕」は二秒でそれを終わらせる。あたかも、ひとりひとりの人間のよろこびや苦しみを、神がほとんど問題にしないかのように。

止めたり、急速に進めたり、意図せず「時間」という神の領域^{かいにょう}に介入^{かんにゅう}していることがある。そんなものが日常にありふれている。知らず知らずのうちに、わたしたちは人間の外に一步出ている。ひとならざる者へと、踏^ふみ込んでしまっている。

そうは言っても、わたしたちは、英語の時制を習ったときのように、左から右へと大きな矢印⁵がひかれるような時間軸を、本当に生きているのだろうか。

たしかに生きている。自らを語るとき、わたしたちは生^おい立ちとして、いつ生まれ、何があり、何歳^{なんざい}でどうなったか、順を追って話そうとする。それが「わかりやすい」とされているし、伝わりやすいからだ。

だが哲学対話では、しばしば過去の思い出が語られる。⁶「はじめて思い出したんですけど」という前置きで、語りだされる言葉がある。対話の場では、ひとは互^{たが}いの言葉をよくきいている。よくきくということは、それだけ他者がわたしの中に流れ込んでくるということだ。流れ込んだ他者を、わたしと出会わせて、言葉を見つけていく。そうすると、わたしの中の他者がうごめいているのを見つける。なんとか引^ひき張り出して、少しずつその感触を確かめる。困難な作業だ。うろろと視線がさまようように、語りもそこら中をうろつくことがある。

あちこちをさまよってしまうのは、話題や問いだけではない。過去なのか、未来のことなのか、いま考えているのか、語

りは時間を飛び越えて、いろいろな場所を歩きまわる。それをよくきこうとすると、わたしたちもまた、そのひとの時間を生きていることになる。

過去の話をするならば過去へ、別の過去の話をするならそこへ、などといった行儀のいいものでもない。ある過去と、その過去と、あの過去が、同時に存在するかのようには語られることもある。互いに混入し、サカイメがわからなくなってしまうことも多い。

7 そんな語りは、神のふるまいというよりは、むしろ地を這う人間のもがきのようにも見える。なぜだろう。

時間を止めたり、急速に進ませたりなど、時間を意図せずとも手中に収めるようなふるまいではないからだろうか。それよりも、てのひらに収めきれず、こぼれてしまうように語るからだろうか。領域を侵しているというよりは、時間そのものに翻弄されているからだろうか。

翻弄されながら、わたしたちはなおも願うときがある。時間をどうにもできないからこそ出てくる祈りだ。

父母を玉虫厨子に閉じこめわたしをもう一度孕むまで

(大森静佳)

もうすでにこの世に生まれ落ちた「わたし」が、父母を閉じ込めることによって、もう一度孕まれることを望んでいる。おかしな時間が流れている。「もう一度」わたしが母親の胎内にいることになるならば、それを祈るわたしは一体どこにいるのか。生まれ直すわたしは、祈りをもつわたしと、どう折り合うのか。

8 しかしそうした矛盾を抱えた願いがこぼれ落ちるほどに、何かに対して「わたし」は切実なのだ。黒板にまっすぐに引かれる時制をあらわす矢印を、ぐるりと旋回させて、円にしたい瞬間があるのだ。

人間は神のようにもなれるし、やはり神のようにはなれない。だがどちらも、本人にとってはゲキテキであっても、ひっそりと生じている。わかりやすい形で、仰々しく行われはしない。当たり前顔をして、歩き去っていくこともある。

9 哲学モメントは、つねにあるのに、つねに隠されている。つねに隠されているのに、つねにあるのだ。

(永井玲衣『世界の適切な保存』)

② 条理が異化されてしまう…当たり前のように受け入れていた物事が、別の見方でとらえられてしまうようなこと。

玉虫厨子…法隆寺が所蔵する飛鳥時代の厨子。厨子は主に仏像などを納めておく戸棚で、両開きの扉が付いている。

問一 ……線部 a f のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「奇妙な言葉遣い」とあるが、気象予報士の「言葉遣い」はどのような点で「奇妙」だと言っているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 天気をわかりやすく伝えるために工夫した結果、詩のようにも感じられる、天気予報でしかみられない表現になっている点。

イ 天気の変化を直感的に理解してもらおうとするあまり、詩的なたとえを必ず用いた、日常にはない言い回しになっている点。

ウ 見ている人の印象に残るように、イメージをあざやかに伝えられる、優れた詩のような平易な言葉遣いになっている点。

エ 天気予報を見る人をロマンチックな気分させて、予報が外れてもあまり怒られないように詩的な表現になっている点。

問三 ― 線部 2 「そのふしぎさ」とあるが、ここではどのようなことを「ふしぎ」だと言っているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 詩のような言葉で、内容よりもロマンチックな雰囲気^{かんいき}を優先する天気予報のあり方を、現代の人間は喜んで受け入れていること。

イ 未来の天気が表示されても、実際にはしばしば予報が外れて迷惑^{めいわく}をかけられているというのに、誰もなくそうとは言い出さないこと。

ウ 古代の人々には未来のことなどわからなかったのに、現代では当たり前のように、天気予報で未来の天気を知ることができること。

エ 未来の天気を予想する行為は、人間の能力を超えた神の領域に達しているのは明らかだが、誰もがそこに気づかぬふりをしていること。

問四 ― 線部 3 「お告げのように体感される」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 天気予報による未来についての予想は、科学という確かなものとは違って根拠^{こんきょ}がはっきりしないまま示されるにすぎず、神の預言のように当たる時もあれば外れる時もあるから。

イ 本来なら人間の手には届かず神の領域に属するはずの未来のことが、天気予報によって落ち着いた調子で当たり前のように示されることで、聞く側の時間の感覚が動かされるから。

ウ 未来について天気予報が確信をもって伝えてくることで、未来が先々まで見通せているような感覚に包まれ、あたかも神と一体化したような心の高まりがもたらされるから。

エ 今はまだ存在していない未来が、まるで神のふるまいのようにはっきりと示される天気予報によって、自分の目指すべき未来までもが示されているような気がしてくるから。

問五 ― 線部 4 「冷蔵庫も、ほんの少しだけ神的なるものの感触がある」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 時間がたつても食べられる状態で食品を保存できるということは、人間の限界を乗り越えた科学の成果だと感じられるから。

イ 扉を閉めて放置するだけで食品が腐らなくなることは、あたかも目に見えない神の力の恩恵^{おんけい}であるかのように感じられるから。

ウ 食品が腐るのを遅^{おく}らせることは、時間を操^{あやつ}するという点において人間の営みを超越した行為であるかのように感じられるから。

エ 中に入れた食品を時間がたつても腐らない不自然な食品に作りかえることは、科学とは別の神秘的な御業^{みわざ}だと感じられるから。

問六 ― 線部 5 「左から右へと大きな矢印がひかれるような時間軸」とあるが、どういう時間のあり方のことを言っているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア しばしば過去と現在を行ったり来たりしながらも、おおむね未来に向けて流れていくあり方。

イ 朝・昼・夜から成り立つ一日や、季節をめぐらす一年のように、繰り返しながら進んでいくあり方。

ウ いつでも同じ間隔^{かんかく}で進む時計の時間と異なり、時に早く感じたり逆にゆっくり感じたりするあり方。

エ 過去から現在を通して未来へと一方向によどみなく流れていき、後戻りすることのないあり方。

問七 —— 線部 6 『はじめて思い出したんですけど』という前置きで、語りだされる言葉がある」とあるが、「哲学対話」においてこのような言葉が発せられるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他者の話を聞き、自分の中の感覚や経験と照らし合わせるうちに、忘れていたことや氣にとめていなかったことがふと思い起こされることがあるから。

イ 他者の話をよく理解し、他者と自分が思いを共有することで、過去の何気ないことでも気軽に言い合えるような関係性ができあがることがあるから。

ウ 他者の話をよく聞き、その人の過去の思い出が自分のものとして追体験されるようになることで、自分の過去の記憶がぬりかえられることがあるから。

エ 他者の話を理解し、他者の思い出に寄りそううちに、自分の中の似た経験を元に、ありもしない思い出話を語りたくなってしまうことがあるから。

問八 —— 線部 7 「そんな語りは、神のふるまいというよりは、むしろ地を這う人間のもがきのようにも見える」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 過去と現在を混在させてしまうような語りには、過去の思い出にすがりながら精一杯その時その時を生きようとする人間の苦しみが表示されているということ。

イ ある過去と別の過去との区別があいまいになった語りには、本来は時間をきれいに順序だてて把握することができない人間の限界が表示されているということ。

ウ あやふやな記憶をたぐりよせて言葉にするような語りには、過去には戻れないという宿命にあらがおうとする人間の切実さが表示されているということ。

エ 様々な過去の出来事へ話題が転々としてしまう語りには、時間によりまわされながらもなんとか言葉をつむごうとする人間の必死さが表示されているということ。

問九 —— 線部 8 「そうした矛盾を抱えた願いがこぼれ落ちるほどに、何かに対して『わたし』は切実なのだ」とあるが、この表現にもとづいて考えると、—— 線部の短歌を筆者はどのように読み取つていると言えるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 時間の流れに逆らってやり直したいと願い、それが実現できないとわかっていてもなお願わずにはいられないほど、何かに対してあきらめきれない思いを「わたし」が抱えていることが表現されている。

イ 父と母を閉じ込め、母のお腹の中に戻って何かに対してやり直したいと祈らずにいられないほど、いまの状況を作り出した父と母に対して「わたし」が強い不満を感じていることが表現されている。

ウ 玉虫厨子があつた太古の昔から誰もが何かに対して後悔を抱えていて、生き直したいと願う瞬間が必ずあるものなので、時代を問わず共通するような「わたし」たちの祈りが表現されている。

エ 忙しい暮らしの中でめまぐるしく過ぎ去っていく時間の流れに翻弄され、何一つ願いを達成することができないまま、あつという間に人生を終える「わたし」のもどかしさが表現されている。

問十 —— 線部 9 「哲学モメントは、つねにあるのに、つねに隠されている。つねに隠されているのに、つねにあるのだ」とあるが、どういうことを言っているのか。「カレンダーをめくる行為」を具体例として取り上げたうえで、「哲学モメント」がどのような瞬間であるかを明らかにしながら、次の書き出しに続けて、一〇〇字以上、一二〇字以内で説明しなさい。

カレンダーをめくる行為は、（

）

二〇二五年度 帰国生入試 国語解答用紙（1）

受 験 番 号

氏 名

	①
	②
	③
	④
	⑤

	解答用紙 2
--	-----------

合 計

◆右のらんには何も書かないこと。

問 一

--

問 二

--

問 三

--

問 四

--

問 五

--

問 六			
80	60		

問 七

--

問 八

--

問 九

--

二〇二五年度 帰国生入試 国語解答用紙（2）

受 験 番 号

氏 名

	①
	②
	③
	④
	⑤

小 計

◆右のらんには何も書かないこと。

二

問 一	
d	a
e	b
f	c

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七

問 八

問 九

問 十						カレンダーをめくる行為は、
120	100					

二〇二五年度 帰国生入試 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合計

問一
ア

問二
エ

問三
イ

問四
ウ

問五
イ

問 六			
明	人	る	辞
し	に	道	書
て	声	具	の
褒	を	で	中
め	か	あ	身
ら	け	る	に
れ	て	辞	は
た	も	書	飽
い	ら	を	き
と	い	持	た
思	っ	っ	が
っ	知	て	っ
て	っ	外	か
い	て	に	し
る	い	出	こ
か	る	て	い
ら	言	っ	と
。	葉	周	威
	を	囲	張
80	説	の	れ

問七
ア

問八
イ

問九
ア

二〇二五年度 帰国生入試 国語解答用紙(2)

受験番号

氏名

①
②
③
④
⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

問 一	
d	a
破	人工
e	b
境目	余地
f	c
劇的	処理

問二
ア

問三
ウ

問四
イ

問五
ウ

問六
エ

問七
ア

問八
エ

問九
ア

問 十					カレンダーをめくる行為は、
う	不	に	営	で	一
こ	思	や	み	あ	見
と	議	り	と	り	す
。	に	す	し	な	る
	思	ご	て	が	と
	え	し	も	ら	日
	る	て	捉	、	常
	瞬	し	え	実	的
	間	ま	ら	は	で
	に	う	れ	時	な
	満	日	る	間	ん
	ち	常	よ	を	で
	て	も	う	無	も
	い	、	に	理	な
	る	よ	、	に	い
	も	く	深	進	行
	の	考	く	め	為
	だ	え	考	る	の
	と	る	え	神	よ
	い	と	ず	の	う